

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.200

July 2019

ホモ・サピエンス史の中のアメリカ史

金井 光太郎

世界史をホモ・サピエンスのたどった跡を探るものとして再構成する歴史書が注目を浴びるようになった。ジャレド・ダイヤモンドが『銃・病原菌・鉄』で諸大陸の異なる環境の中で暮らしていたホモ・サピエンス同士の衝撃的な出会いを描いて見せた。最近では、ユヴァル・ノア・ハラリのベストセラー、『サピエンス全史』がホモ・サピエンスの誕生から現代文明まで大きく俯瞰することで話題をさらっている。こうした成果によって、それまでのホモ族人類とも決定的に違う認知能力をもってホモ・サピエンスが世界を大きく変容させてきた歴史的意義が考察できるようになった。アメリカ大陸においては、ホモ・サピエンスが活動した場として3つの点に注目してみたい。

まず、メソアメリカ文明の驚異である。ホモ・サピエンスは8万年ほど前に生誕の地、アフリカ大陸を出て環境の著しく違う諸地域に拡がり1万年ほど前にアメリカ大陸南端までたどり着いた。アフロ・ユーラシア大陸とは切り離され、以後アメリカ大陸は多文明間の交易交流が限られてしまった。大陸内でもアメリカは赤道を中央に挟んで南北に拡がり、各地の人類が頻繁に交流することは困難があった。また、大陸に息する生物種にも恵まれていなかった。羊や馬、牛、豚、鶏など家畜となる大型動物はおらず、ラマやアルパカがいる程度であった。このことは健康面でも、動物からの病原菌が限定され結果的に数少ない病疫の免疫しか持たないことにつながった。植生においても、農耕栽培に適したムギやコメ、アワなどの穀物が自生せず、トウモロコシとジャガイモが主要な作物となった。アフロ・ユーラシア大陸と比べて、これほど恵みの薄い環境にありながら、アメリカ大陸のホモ・サピエンスがサピエンスを駆使して紀元前からメソアメリカ文明を発展させ、アステカとインカの大帝国を築き上げ大陸全体で1億近い人口を維持していたのは驚異というほかない。

次いで、コロンブス交換はアメリカ大陸が主要舞台である。コロンブスの航海によりアフロ・ユーラシア大陸とアメリカ大陸との交流が大々的に始まった。ユーラシア大陸からもたらされた家畜や穀物はアメリカ大陸の環

境に適合しており、巨大な牧場や農場が開発されて世界の農業を変貌させ、ひいては社会階層の再編や人口移動を引き起こした。他方、アメリカ大陸からもたらされたジャガイモはヨーロッパなどの貧農の栄養源となって飢餓を救う面もあったが、地主の搾取を強化することにもなった。北アメリカのチェサピーク湾入植地は強力な先住民の連合勢力に圧倒され、いつ消滅しても不思議ない情勢であったのに、アメリカ原産のタバコ栽培が成功しヨーロッパに輸出するプランテーション経営が発展したのもこの交換の一環である。そのため大量の奉公人がやって来たことでイギリス系人口が先住民を圧倒し排除していった。さらに、プランテーション経営が南部社会の中心となり、労働力としてアフリカ系奴隷を導入することで長く続く紛争の元を作った。

最後に、巨大技術による開発の問題が明らかとなる。急速な西部開拓も東経100度の壁に突き当たり、諸民族の伝統的なサピエンスをかき集めて試しても開拓は進まなかった。しかし、20世紀後半には巨大な技術と資本、エネルギーを投入することで大規模な資源開発、アグリビジネス、不夜城の現代都市建設が可能となった。巨大開発に特に大きく貢献したのが、自動車と高速道路の普及および電力エネルギーの開発である。同じ厳しさの中に身を置いていたアメリカ先住民の場合は環境に合わせて何とか生活を維持することで満足していた。それに対して現代人の場合、人間の快適さに合わせて環境そのものを作り替えコントロールしようとする営みに踏み込んだものといえよう。

今やホモ・サピエンスのサピエンスは地球のどこであっても均質な文明生活を実現する技術力を手に入れようとしている。しかし、それは気候変動に代表されるように地球環境を回復不可能なほど破壊してしまう恐れがある。本当に人類は自分たちの快適さだけを何よりも優先させて生態系を壊すことを顧みないのか。厳しい環境を造り替えるのではなく適応にサピエンスを働かせたアメリカ先住民の経験は貴重である。地球環境を持続可能とする生き方の追求をホモ・サピエンスの歴史全体から問い直す時代が来ている。

アメリカ学会 2018 年度事業報告

1. 会員数

学会運営の適正化と経費節減のため、内規第 I 条 3 項「年会費を 3 年間滞納すると退会処分となる」に照らして 12 名を除名した。それに伴い 2019 年 3 月 31 日現在の会員数は 1,103 名（一般会員 959 名、院生会員 109 名、海外会員 12 名、名誉会員 7 名、維持会員 16 社）となり微減した。異動内訳は以下の通り。

〔前年度末 1,120 名*〕

新入会員 32 名（一般 17 名、院生 11 名、海外 4 名）

退会者 49 名（除名 12 名、逝去 1 名、希望退会 36 名）

* 前事務局（学協会サポートセンター）では、近年、過年度の退会希望者の退会処理が次年度以降にずれ込むことが多々あったことが今般判明したため、上記の前年度末の会員数は、現在の実数から逆算したものであり、会報 197 号に掲載の 2017 年度事業報告のものとは異なっている。

2. 評議員の選出について

2018 年 6 月 22 日を締め切りとして理事に評議員の推薦を依頼し、その中から 50 名の評議員を選出した。

3. 事務委託先の変更

2013 年より学会の事務局業務を委託してきた有限会社学協会サポートセンターが 2019 年 3 月 31 日で解散することとなったため、後継の委託先として有限会社あゆみコーポレーションが選定され、2019 年 4 月 1 日より事務局業務にあたっている。

4. 学会誌出版元の変更について

『アメリカ研究』第 52 号の編集を委託した木鐸社から、第 53 号より株式会社国際文献社に編集を委託することとなった。

5. 会務委員会

2019 年 2 月に PDF 版会員名簿を完成させ、2019 年 2 月 27 日より 3 月 31 日まで学会ウェブサイトにて会員向けに公開した。事務委託先の変更に伴い、引継業務を行った。2018 年に評議員の選出、2019 年に会長選挙を行った。

6. 年次大会企画委員会

2019 年度年次大会（第 53 回）は、会報第 199 号に記載の要領に従い、法政大学にて 6 月 1 日～2 日に開催された。開催にあたっては、アメリカ研究振興会から財政的支援を受けた。2020 年度年次大会（第 54 回）は、北海道大学にて、2020 年 6 月 13 日～14 日に開催予定である。

7. 年報編集委員会

(1) 年報『アメリカ研究 (*The American Review*)』第 53 号を 2019 年 6 月に刊行した。出版元が変更となり従来とスケジュールが変わった関係で遅延が生じた。執筆者各位には、ご理解に深謝したい。

(2) 会報『アメリカ学会会報 (*The American Studies Newsletter*)』第 197 号、第 198 号、第 199 号を発行した。

8. 英文ジャーナル編集委員会

英文ジャーナル、*The Japanese Journal of American Studies* 第 29 号を 2018 年 6 月に刊行した。2018 年 6 月より、編集長杉山直子、副編集長佐久間みかよで編集委員会を運営し、編集会議を行なっている。

9. 清水博賞選考委員会

第 24 回アメリカ学会清水博賞を 1 名に授与した。

10. 斎藤眞賞選考委員会

本賞は 2 年に 1 度の賞であるため 2018 年度は実質的な活動は行わなかった。

11. 広報・電子化情報委員会

学会ウェブサイトの管理と更新ならびにメーリングリストの管理に加え、各種広報戦略業務について協議を進めた。

12. 国際委員会

(1) 以下の事業を行った。

① 2018 年度 JAAS 年次大会にてワークショップ A/B “Transpacific Overtures: The Black Atlantic and Settler Co-

- lonialism”を開催した。
- ② ASA との共同プロジェクトとして東京大学と京都大学でプロセミナーを開催した。
- ③ OAH 短期滞在プログラムを中央大学と福岡大学で実施した。
- ④ ASAK より招聘を受け、年次大会（2018年9月14日～15日）に高橋裕子会長、下條恵子会員を派遣した。
- (2) アメリカ学会海外渡航奨励金
2018年度前期1名、後期1名に給付した。2019年度からは「原則として」アジア圏5万円、アジア圏以外15万円とし、いずれにも該当しない地域には柔軟に金額を決めることとなった。
- (3) 2018年度 ASA 年次大会委員派遣、日米友好基金の大学院生補助給付
2018年11月8日～11日にアトランタで開催された年次大会に国際委員2名を派遣、日米友好基金による年次大会参加費用補助金を計4名に給付した。
- (4) 日米友好基金給付金による ASA 研究者の2019年度 JAAS 年次大会招聘者決定
2019年度招聘研究者を West Chester University の William Nessler 氏および Bowling Green State University の Jolie Sheffer 氏に決定した。
- (5) 2019年度 ASA 年次大会 ASA-JAAS 共催パネルとアメリカ研究振興会による助成
2019年11月7日～10日にホノルルで開催される ASA 年次大会で2つの ASA-JAAS 共催パネルを開催することが決定し、計6名の会員を派遣することになった。これら6名に旅費補助を行うためアメリカ研究振興会に助成を申請し採択された。
- (6) 日米友好基金給付金による OAH 研究者短期滞在プログラムのゲスト研究者決定
東北大学（6月1日～14日）に Oberlin College の Renee Romano 氏、成城大学（5月27日～6月10日）に Lewis and Clark College の Elliott Young 氏が決定した。
- (7) 2019年度 OAH 年次大会委員派遣、共催セッション開催、日米友好基金の大学院生補助給付
2019年4月4日～7日にフィラデルフィアで開催された年次大会に国際委員2名を派遣した。OAH 委員会との共催パネルにおいて JAAS 会員の大学院生3名が報告を行い、日米友好基金による年次大会参加費用補助金を給付した。これとは別に、大学院生用の補助金を3名に給付した。
- (8) ASAK 研究者2019年度 JAAS 年次大会参加者および ASAK 年次大会参加会員の推薦
2019年度 JAAS 年次大会には、Ki Yoon Jang 氏および Jungman Park 氏を招聘した。2019年9月20日、21日に高麗大学（ソウル）にて開催される年次大会に招聘される会員として、佐久間みかよ理事および菅美弥評議員を派遣することに決定した。
- (9) 2020年度 OAH 研究者短期滞在プログラムのホスト校決定
明治学院大学（担当：野口久美子会員）、弘前大学（担当：南修平会員）に決定した。
- (10) 2019年度 JAAS 年次大会ワークショップ A/B の決定
2019年度 JAAS 年次大会で開催されるワークショップ A/B “Walled Worlds: Sovereignty, Nationalism and Globalization” を決定した。
- (11) 2019年度プロセミナー開催
2019年6月3日に中央大学、6月4日に同志社大学で開催されるプロセミナーを決定した。
- (12) 2019年5月31日夕食会
年次大会前夜の5月31日に海外ゲストとワークショップ登壇者を招待してウェルカム・ディナーを開催した。

13. 会長選挙について

2019年5月8日を締切として理事を対象に次期会長選挙を実施した。5月13日に開票した結果、宇沢美子会員（慶応義塾大学）が選出された。

次期会長選挙結果について

5月8日締め切りで理事による次期会長選挙の投票が行われ、投票総数は27票で選挙は成立し、投票の結果、宇沢美子会員が過半数を獲得して、次期会長に選出されました。

2019年5月13日 次期会長選挙管理委員会（土屋和代、橋川健竜、松原宏之）

2018 年度決算及び 2019 年度予算

さる 6 月 2 日の総会において 2018 年度決算及び 2019 年度予算についてご承認をいただきました。ここに収支報告および予算案を掲載し、会員各位へのご報告とさせていただきます。なお、2018 年度の収支報告は、出納

帳その他の関連書類とあわせて、遠藤泰生、森本あんり各監事の監査を受け、適切と認める旨の監査報告書が提出されていることをご報告いたします。

(財務担当 西山隆行)

アメリカ学会 2018 年度 収支報告

□収入の部		(単位：円)	
科 目	2018 年度予算	2018 年度決算	
1. 年会費	9,000,000	8,852,000	
2. 雑収入(雑誌売上, 利息)	400,000	271,533	
3. 広告収入	30,000	32,000	
4. 寄付金	158,506	158,506	
5. アメリカ研究振興会助成金	1,448,840	1,448,840	
6. 日米友好基金(OAH)	1,982,751	1,978,751	
7. 日米友好基金(ASA)	430,000	0	
小 計	13,450,097	12,741,630	
8. 前期繰越金	17,353,156	17,353,156	
合 計	30,803,253	30,094,786	

アメリカ学会 2019 年度 予算案

□収入の部		(単位：円)	
科 目			
1. 年会費		9,000,000	
2. 雑収入(雑誌売上, 利息)		400,000	
3. 広告収入		30,000	
4. 寄付金		0	
5. アメリカ研究振興会助成金		1,000,000	
6. 日米友好基金(OAH)		1,982,751	
7. 日米友好基金(ASA)		430,000	
小 計		12,842,751	
8. 前期繰越金		17,335,140	
合 計		30,177,891	

□支出の部

科 目	2018 年度予算	2018 年度決算	
1. 会計費	3,120,000	3,514,830	
01) 事務局人件費	600,000	650,886	
02) 業務委託費	950,000	1,402,920	
手数料	20,000	27,399	
03) 常務理事会費	300,000	257,000	
04) 会費郵送通信費	130,000	131,494	
05) 事務用品費	100,000	359,176	
06) 広報・電子化情報委員会費	500,000	231,769	
07) 将来構想委員会費	0	0	
08) 名簿作成費	200,000	235,340	
09) 選挙関連費	100,000	0	
10) 口座振替・郵便振替手数料	120,000	168,346	
11) 会務雑費	100,000	50,500	
2. 研究事業費	11,650,000	9,244,816	
01) 年次大会費	2,100,000	2,070,718	
(1) 準備費	300,000	0	
(2) 大会費	1,500,000	1,711,718	
(3) 企画委員会費	300,000	29,000	
(4) 非定職者旅費補助		330,000	
02) 国際交流費	3,200,000	2,564,500	
(1) 国際交流活動費	500,000	384,500	
(2) OAH 短期滞在	1,700,000	1,720,000	
(3) ASA 年次大会派遣	300,000	160,000	
(4) OAH 年次大会派遣	200,000	200,000	
(5) 海外渡航奨励金	500,000	100,000	
03) 年報刊行費	3,200,000	2,123,273	
(1) 年報編集委員会費		749,270	
(2) 年報印刷費		1,135,555	
(3) 年報郵送通信費・雑費		238,448	
04) 英文ジャーナル刊行費	1,700,000	1,275,129	
(1) 英文編集委員会費		86,556	
(2) 英文印刷費		707,211	
(3) 英文郵送通信費・雑費		187,362	
(4) コピーエディター雑費		294,000	
05) 会報刊行費	950,000	941,585	
(1) 会報印刷費		392,795	
(2) 会報郵送通信費		548,790	
(3) 会報雑費			
06) 清水博賞委員会費	300,000	269,611	
07) 斎藤眞賞委員会費	50,000	0	
08) 研究教育支援費	150,000	0	
09) 研究事業予備費	0	0	
小 計	14,770,000	12,759,646	
3. 次期繰越金	16,033,253	17,335,140	
合 計	30,803,253	30,094,786	

□支出の部

科 目			
1. 会計費		4,382,056	
01) 事務局人件費		600,000	
02) 業務委託費		2,102,056	
03) 常務理事会費		300,000	
04) 会費郵送通信費		130,000	
05) 事務用品費		100,000	
06) 広報・電子化情報委員会費		500,000	
07) 将来構想委員会費		0	
08) 名簿作成費		0	
09) 選挙関連費		400,000	
10) 口座振替・郵便振替手数料		150,000	
11) 会務雑費		100,000	
2. 研究事業費		10,910,000	
01) 年次大会費		950,000	
(1) 準備費		300,000	
(2) 大会費		200,000	
(3) 企画委員会費		300,000	
(4) 非定職者旅費補助		150,000	
02) 国際交流費		3,760,000	
(1) 国際交流活動費		500,000	
(2) OAH 短期滞在		1,700,000	
(3) ASA 年次大会派遣		600,000	
(4) ASAK 年次大会派遣		160,000	
(5) OAH 年次大会派遣		300,000	
(6) 海外渡航奨励金		500,000	
03) 年報刊行費		3,200,000	
(1) 年報編集委員会費			
(2) 年報印刷費			
(3) 年報郵送通信費・雑費			
04) 英文ジャーナル刊行費		1,700,000	
(1) 英文編集委員会費			
(2) 英文印刷費			
(3) 英文郵送通信費・雑費			
(4) コピーエディター雑費			
05) 会報刊行費		950,000	
(1) 会報印刷費			
(2) 会報郵送通信費			
(3) 会報雑費			
06) 清水博賞委員会費		300,000	
07) 斎藤眞賞委員会費		50,000	
08) 研究教育支援費		0	
09) 研究事業予備費		0	
小 計		15,292,056	
3. 次期繰越金		14,885,835	
合 計		30,177,891	

西山智則 著

『エドガー・アラン・ポーとテロリズム

——恐怖の文学の系譜』

(彩流社, 2017年, 1,944円)

サブカルチャーで「偽装」し、サブカルチャーに「寄生」したエドガー・ポー。果たして、それは如何なる「ポー」であるのか。本書は、従来のテキスト／文化研究を敷衍し、サブカルチャー文化論に接続したポー研究である。サブカルのなかにポーの「声」を聞く。それは、ポーのテキストを蘇らせる「再生医療」であり、メディア・ミックスにおける彼の影響を再確認する仕事だろう。『ポーの一族』、『キング・コング』、『フリークス』、そして偏在するポー。しかしながら、その影を捉え、体系化するのには容易ではない。

サブカル化するポー。そのポップで軽いイメージと裏腹に、本書は博覧強記の著者による正統派のポー文化論である。実際、本書が取り扱う研究書や関連作品は膨大であり、著者のポー研究の集大成と言っても過言ではない。重要なのは、その重厚なテーマに対し、縦横無尽な語り口がポップであることだ。

第1章「盗まれた文学」は分身をめぐる章である。「ウィリアム・ウィルソン」からクローン、署名に至る分身表象。それは「複製／盗み」という主題と連動し、テキストを超えて感染、流通する。第2章「猿たちのテロリズム」でも、そのスリリングな語りは健在。「恐怖」は如何に生成され、継承されるのか。「モルグ街の殺人」から『キング・コング』に至るダークな「猿」表象は、19世紀から現代に至る恐怖を代弁し、植民地主義の痕跡を示すだろう。第3章「ゆがんだ眼の男たち」では、視覚と写真の関係性を問い、ヒッチコックからワールド・トレード・センターの倒壊に至るスペクタクルとアポカリプスの交差に言及する。そして、第4章「博物館の帝国」では、人種のカテゴリとその収集が行われた帝国主義の時代を活写し、読者はまさにグロテスクなナイト・ミュージアムを体感するだろう。第5章「戦慄の絆」と第6章「アメリカン・シアターとしてのフリークショー」では、異形／スペクタクルの身体としてのフリークスが焦点である。シャム双生児とフリークショー、或いは反復する分身。これらは人種概念の構築と攪乱の可能性を提示するだけではない。それはポーが仕掛けた「恐怖」であり、著者の言葉を借りれば、「テキストのテロリズム」だろう。

興味深いことに、ポーの扇情性は著者にも感染したようである。本書の特徴である不気味な図版の数々は、それだけでも恐怖を喚起するに余りある。恐怖の分身、或いは偏在。我々は、新世紀のポー論に文化研究の可能性を感じるはずだ。

塚田幸光 (関西学院大学)

巽 孝之 著

Young Americans in Literature:

The Post-Romantic Turn in the Age of Poe, Hawthorne and Melville

(彩流社, 2018年, 2,376円)

本書は膨大な著作を誇る著者によって全編英文で書かれた待望のアメリカン・ルネサンス文学論集である。これに遡ること30年前、著者は『文学する若きアメリカ』(1989年)を共著出版した。共に「若さ」がキーワードである。著者は本書の序論で、1987年にコーネル大学に博士論文を提出した頃を回顧しているが、そこから現在に至る30年という時間は、本書でアメリカン・ルネサンスの範囲とされる1832～60年の約30年間におそらく意図的に重ねられている。アンテベラムの作家はヨーロッパ・ロマン派を「ラディカルに読み直し、書き直し、転用した」(21)。それが題名にある「ポストロマン主義的転回」の謂である。同様に本書はアメリカン・ルネサンス研究の時代／地域／ジャンル横断的転回を企図し、従来にはなかった脈絡から古典アメリカ文学を「創造的に再読する」、批評的なrenaissance, regenerationなのである。本書が極めて若々しい印象を与えるのはそのためである。

たとえば、序論ではカント、コールリッジ、カーライル経由でエマソンの『代表的人間』が論じられ、ロマン派とヤング・アメリカ各々が希求する「天才」の概念が対比される。第2章ではオリジナリティと剽窃という観点からホソン、ポー、ロングフェローからヨネ・ノグチ、パウンドに至る斬新な文学的系譜が描かれ、個人の才能という伝統的な創作観が作家間の影響を通じた「協働的創造力」(70)というモダニスト的概念へと転換される。第6章ではモービー・ディックを憎悪する『白鯨』のエイハブ(Ahab)と奴隷制を「邪悪な巨鯨」と見なして打倒しようとするエイブラハム(Abe)・リンカンが並置され、メルヴィルとリンカンが奇しくも1920年代の同時期に再評価された歴史的・文化的機縁が語られる。著者はこのように文学史を飛躍的に長距離移動しつつ、新たな地図を描き出していく。

その一方、移動距離は比較的短いのが、その分地層を深く掘り下げた章があり、精読が著者の文学研究を強固に支えていることがよくわかる。たとえば、「モルグ街の殺人」の中に南部貴族の知的エリート主義と、奴隷制と土地所有権の解体に対する恐怖心を合わせ読む第1章、『緋文字』と『白鯨』の影響関係を「所有権」(ヘスターを巡る夫と愛人、鯨に最初に鋸を打った者と最終的に捕獲した者)の問題や「断頭」(政権交代による臍首と鯨の頭部の解体)といった主題から探る第4章は特に興味深い。エミリー・ディキンソンの詩の中に「周縁」へ向かう志向をメタフィクショナルに読み取り、それが男性的権威に対する抵抗の手段でもあり、ジョゼフ・コーネルやウィリアム・ギブソンといった現代芸術家・作家に波及するインスピレーションでもあることを論じた結論は、精読と創造的読解が結合した非常に刺激的な論考である。

本書を教科書として用いれば、「創造的再読」を若い世代にさらに同心円状に拡大し、今後もアメリカ文学研究に「若さ」を維持できるのではないかと。通読してそのようなことも考えた。

西谷拓哉 (神戸大学)

宮里政玄先生追悼

沖縄からアメリカ，世界へ——宮里政玄先生の眼差し

喜納育江（琉球大学）

宮里政玄先生に初めてお会いしたのは、先生が2012年に受賞された沖縄タイムス出版文化賞の授賞式でのことだった。同僚で国際政治学者の我部政明先生に誘われて那覇市内の会場へ足を運んだ。会場では、祝辞を述べようと駆けつけた人々が、受賞者の前に長い列をなしており、我部先生と私も列に並んだ。順番が来て、我部先生が私を紹介してくださった時、宮里先生は初対面の私を見て少し戸惑ったような表情をされた。私にはこやかに祝辞を述べたが、宮里先生は表情を変えずじっと私を見つめた。緊張した私の心の中を見透かすような、眼光の鋭い人だった。

宮里先生の人生の物語は『学問と現実の津梁——戦後沖縄を生きて』（琉球新報社、2011年）にご自身の言葉で綴られているので、ここでは詳細に繰り返さない。ただ、このユニークな「自分史」から伝わるのは、宮里先生が、最後まで矮小なしがらみにとらわれない、自由な国際政治学者だったということである。戦火で焦土と化した後も米国統治下に置かれた沖縄で、明日の生活の糧を得る手段として英語を学び、その後は米国の大学で国際政治学の最先端の理論を研究された。マスキングム大学で学士号、ウェスタン・リザーブ大学で修士号、オハイオ州立大学で博士号を取得されている。この時期には、沖縄から多くの若者が米国政府の奨学金を得て渡米し、米国の大学で学位を修めたが、宮里先生も、そんなトランスナショナルなウチナーンチュ（沖縄人）研究者の一人だったと言える。

帰国後に一時は琉球大学で教鞭を執られたが、ほどなく新潟の国際大学、そして独協大学へと、常にご自身の研究の次なるステップを実現できる場を求めて移動された。日本国際政治学会名誉理事に就任する一方で、斎藤眞先生など、アメリカ学会の先生方との親交も深かった。相手がアメリカ人、日本人にかかわらず、自らが高く評価する人であれば、敬意を持って分け隔てなく関わる姿勢は、沖縄という故郷に置かれた揺るぎない軸足と弛まぬ研鑽に裏打ちされた、研究者としての自信の表れだったと私は思う。

「私は猪突猛進型で、冒険を繰り返してきた」と回想された先生が、ご病気を機にその冒険人生の締めくくりに選んだ活動の場は沖縄だった。独協大学を退職後に帰郷し、志を共にする故郷の仲間と「沖縄対外問題研究会」を設立した。日米の政策に翻弄され続けるだけでなく、より広いグローバルな政治動向をいかに見極め、自律的に存続できるかという問いを、今度は沖縄の市民に突きつけ、共に考える場を作り出した。87歳の生涯を閉じられたのは、2019年4月8日、まだその冒険の只中だった。「我々は沖縄の将来をしっかりと考えているか」「私は何のためにアメリカを研究しているのか」。宮里先生亡き後の沖縄で、次世代のアメリカ研究者の責務を考える時、そんな問いが、先生あの心の奥を覗き込むような鋭い眼光とともに頭をよぎるのである。

アメリカ学会清水博賞第24回受賞作品と第25回公募のお知らせ

「アメリカ学会清水博賞」は、故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、1996年に設けられました。同賞は、若手会員による最初の単著として刊行された著書のなかから特に優れた作品に授与されるものです。

選考委員会は、第24回清水博賞候補作として、2018年1月1日から12月31日の期間に出版された著書のなかから、自薦・他薦の4点の応募を受理しました。その後、厳正な審査の結果、以下の作品に清水博賞を授与することが決定いたしました。外部査読者として当委員会の審査にご協力いただいた会員の皆様に、厚くお礼申し上げます。

第24回受賞作品：

*Hideaki Kami, *Diplomacy Meets Migration: US Relations with Cuba during the Cold War* (Cambridge University Press, 2018)

今回の審査に向けて会員諸氏のご協力をお願いいたします。当該期間（2019年1月1日から12月31日）に出版された著書について、会員諸氏からの積極的な推薦（自薦・他薦）をお願いいたします。推薦にあたっては、2020年1月10日（金）までに件名「第25回清水博賞候補推薦」にて清水博賞選考委員会（shimizu@jaas.gr.jp）宛にお知らせください。

清水博賞選考委員会

第54回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第54回年次大会は、2020年6月13日(土)、14日(日)に北海道大学にて開催を予定しております(開催校の事情により、日程が例年とは異なり第2週の週末となっておりますので、ご注意ください)。

大会での自由論題報告と部会企画案を、下記の通り募集します。会員のみなさまからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は大会事務局(program@jaas.gr.jp)宛に、1~3のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」(締切日:2019年11月20日)

報告テーマ、1,500字程度の要旨、およびキーワード5つを記載。

自由論題での報告は、海外在住の場合(下を参照)を除き、会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められ、会費納入が確認された時点で正式に審査対象とします。

(海外在住の非会員)第52回年次大会より、海外在住の方(国籍を問わない)は、非会員のままで自由論題での発表が一回のみ可能になりました。ただし、報告が決定した場合は、2020年3月1日までに大会参加費(8,000円)の支払いが必要となります。大会参加費は返金不可となっておりますのでご了承ください。

報告者には2020年5月15日までにペーパー(和文の場合、8,000字~12,000字、英文の場合、5,000~7,500 words程度)を提出していただき、学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後2週間のみペーパーを掲載します。なお、報告内容は未発表のものとし、応募者多数の場合は要旨に基づく選考を行うことがあります。また、英語での報告の場合は、要旨・タイトルは英語としてください。

2. 「部会の企画提案」(締切日:2019年9月6日)

部会のテーマおよび800字程度の要旨、報告者案があればあわせてご提案ください。部会の企画に関しては、以下の申し合わせ事項にご留意ください。第52回、53回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第54回大会の部会では報告できません。司会者、討論者としての応募も避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整をお願いするため、原則学会員としてください。非会員の部会登壇者に対して、学会から謝金、交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、ジェンダーや地域のバランスに配慮してください。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを条件とは致しません。院生など若手の応募を積極的に歓迎いたします。

3. 「分科会開催の申し込み」(締切日:2019年8月31日)

新規の場合は、分科会趣旨(400字以内)と、連絡責任者および賛同者5名の氏名をお知らせください。継続の場合にも、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることをあらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

会員のみなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務(office@jaas.gr.jp)までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようご協力をお願いいたします。

事務局

英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

〈英文書誌投稿についてのお知らせ〉

2018年に出版された英語著作、英語論文（博士論文を含む）に関する情報を学会ホームページ <http://www.jaas.gr.jp/2014/09/post-225.html> で示されている形式に従ってご記入のうえ、電子メール本文に貼りつけて、9月22日までに学会英文ジャーナル編集委員会宛（engjournal@jaas.gr.jp）にお送りください。指示された形式にしたがって原稿を作成していただきますよう、お願いいたします。なお、英文ジャーナル掲載の論文については、この英文書誌に収録しないこととなっておりますのでご注意ください。

〈『英文ジャーナル』投稿についてのお知らせ〉

32号の特集テーマは“transnationalism”です。投稿原稿応募申し込み（論文要旨）の締め切りは2020年1月、原稿締め切りは2020年5月です。特集テーマの他、自由論題による投稿も受け付けます。詳しい日程については、11月の会報（あるいはそれ以前は学会ホームページ）をご覧ください。投稿者はアメリカ学会の会員に限ります。なお『アメリカ研究』との二重投稿、あるいは日本語、英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

新入会員（2019年6月1日現在）

長谷川千春	立命館大学	経
山本桂	東海大学（講）	日 衆 史
小鳥遊書房	維持会員	
八木孝憲	京都大学（院）	外 史 社
森下二郎	早稲田大学（院）	思 文 化
阿部純	東北大学（院）	史 法 政

（*入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ウェブサイトに記載されている新表記法による。）

編集後記

6月に法政大学で開催されたアメリカ学会年次大会に参加した。シンポジウム「人種をめぐる論争」を問い直す」は刺激的であった。従来、アメリカ社会に内在する人種差別を明るみにする試みは行われてきたが、今回は、社会や政治において人種が持つ現実性が議論されたからである。例えば、オバマやウォレンなどのリベラル政治家にとって、少数派の人種アイデンティティは政治戦略として身に纏われたものだという。こうした状況は、アメリカ社会の分断の根深さを示すのか、それとも少数派の声の強さを示すのか。さらなる議論を聞いてみたい。

（森丈夫）

2019年7月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 高橋裕子

編集人 中野勝郎

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町358-5